

# 安孫子家文書から見る 桑港日本人YWCAの設立過程

鈴木 麻倫子

## はじめに

本稿の目的はサンフランシスコで日本人の手により設立された、キリスト教女子青年会（以下、桑港日本人YWCA）について、設立に関わった安孫子余奈子（以下、余奈子）の日記・書簡、関わった団体の機関誌を史料として、設立過程について時間軸を中心に正確に検証していくものである。

また、これまでの先行研究で使われてきた史料を正確に見直し、1912年サンフランシスコに設立された状況について再検証するものである。

1912年のサンフランシスコには日本からの写真花嫁が毎日の様に上陸していた。排日運動の標的となっていたこの写真花嫁については、多くの先行研究がある。アメリカで仕事に従事する日本人男性のもとへ写真を取り交わしただけで嫁いで来る日本人女性とこの制度は、多くのアメリカ人にとって受け入れ難かった。

初期移民男性たちはアメリカでひと稼ぎし、日本へ帰国する事を目的としていたが、現実には文化・風習・言語全てが日本のそれとは異なり、日々の暮らしを送るのがやっとで、とても稼いで資産を増やす様な状況ではなかった。その様な状況に置かれても日本人は低賃金で真面目に労働する事により、重宝されるようになる。やがてその勤勉さが、白人から仕事を奪う形となっていく。さらに日本人移民達は移住当初は母語のみを話し、アメリカに馴染む姿勢を見せなかった。この状況がさらに排日感情を煽っていく事となる。

これに警鐘をならしたのが、安孫子久太郎（以下、久太郎）達である。久太郎は福音会の会員として、不遇な状況下にある移民達を救うべく奔走した人物である。拙稿「安孫子家文書から見る安孫子久太郎と須藤余奈子の出会い」<sup>1)</sup>の中で久太郎の略歴を紹介しているので本稿では割愛する。

久太郎は日本人移民男性たちに定住を促すことから始めた。日本人移民男性たちは定住する事を目標にすると、次々に家族を形成するようになる。日本へ一時帰国し、結婚した後に妻を連れて帰米する者、親戚や両親からの仲介で家同士の結婚を取り交わす者、その中でも最も手軽な手段として広まったのが「写真花嫁」であった。日本人の感覚ではお見合い結婚と変わりのないこの制度だが、アメリカ人には受け入れ難いものであった<sup>2)</sup>。

写真と手紙をやり取りしただけで、アメリカまで嫁いで来る彼女たちに対して嫌悪感を抱いていた。彼女たちが着物に束髪姿で、英語を話せず、アメリカの生活様式も理解しないまま渡米して来た事も原因となった<sup>3)</sup>。

日本人移民女性の悲惨な状況を危惧し、彼女たちに手を差し伸べていた団体がいくつか存在している。これについては安武留美氏<sup>4)</sup>（以下、安武氏）の「北カリフォルニア日本人移民社会の日米教会婦人達―日系一世女性のイメージを再考する―」に詳しい。

安武氏は北カリフォルニアの日本人移民社会において、プロテスタント教会に通うアメリカ人及び日本女性の行った活動を研究対象としている。コミュニティ・人種・階級・ジェンダーの要素が複雑に作用する二者の力関係を分析しながら、彼女たちの生きた社会構造を考察する。一世男性、白人女性の力の行使を受ける側である一世女性のイメージの再考を試みている。また、日米の教会婦人達を以下の様に団体と個人とに区分し、評価している。

1) 「安孫子家文書から見る安孫子久太郎と須藤余奈子の出会い」『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要』 史学編第15号、2016年3月15日

2) 田中景「20世紀初頭の日本・カリフォルニア「写真花嫁」修業―日本人移民女性のジェンダーとクラスの形成―」『社会科学第68号 特集文化の中心と周縁の総合研究』同志社大学人文科学研究所、2002年1月31日、303-334頁

3) 河井道子『わたしのランターン』学校法人恵泉女学園、1968年3月13日、220-221頁

4) 安武留美「北カリフォルニア日本人移民社会の日米教会婦人達―日系一世女性のイメージを再考する―」『キリスト教社会問題研究49号』同志社大学、2000年12月、46-76頁

日本人教会婦人	身元の明らかな同胞女性が日本人社会発展のために健全な家庭を築くことを第一とする。賤業従事者を嫌悪。
白人教会婦人	日本人女性の保護や写真花嫁の救済に使命を感じていた。
フローラ・ハリス	日本人社会に迎合。その為日本人娼婦や身元不明者には閉ざされた施設を創設。
メアリー・ボーエン	日米双方の社会に存在する不公正や偏見に挑戦したため、メソジスト派教会・日本人社会・日本人教会婦人に受け入れられず。しかし写真花嫁や日本人娼婦達は保護を求めることができた。
オリエンタル・ホーム、 キャメロン・ハウス	日本人社会の外にあり、メアリー・ボーエン同様多くの日本人女性の助けとなる。

安武氏が指摘する様に、日本人の教会婦人たちは夫が指導者として移民の社会で活躍していた為、娼婦や写真花嫁に対して日本人社会の発展のための妨げと考える様になっていったのかもしれない。

本稿では所属している階層が異なったとしても、当初は日本人移民女性たちが異国の地で団結し、これから渡米して来る日本人女性の力となる事を念頭に置き、桑港日本人YWCAを設立するに至った経緯を解明していく。設立後に活動の目的意識が変化し、安武氏が指摘する様な団体へと変化したかもしれない。しかし、当時の状況下で必要であると認識され設立された団体である事には間違いなく、それを支援しようとした人達がいたという事実についても注視する必要があると考えている。

桑港日本人YWCAが設立されるに至った経緯と、関わった団体・人物、設立時の状況などを整理し、明らかにする事を本稿の目的とする。

本稿の中で引用する史資料について、一部の漢字について現代常用漢字に改めている。また、日記の一覧については分かりやすいように補足を加え、現代語に改めている。

## 第1章 YWCA女子青年会

### 先行研究の動向

YWCAについての研究はYWCAの諸活動やキリスト教伝道、日本のYWCA発展史、戦時期のYWCA活動、教育機関としてのYWCA、慈善事業、女性リーダーの出現など多角的に行われてきた。今回は多くの先行研究の中から、日本人移民女性への教育活動に焦点を当てた3本の論文を中心に研究の動向とその問題点について紹介する。以下3本の論文は本稿の目的となる桑港日本人YWCAについても触れており、研究を進める上で参考になっている。

1本目は眞崎睦子氏（以下、眞崎氏）の日本人移民女性が渡米するにあたり、そのガイドとしての役割を果たした『渡米婦人心得』という「栞」について考察したものである。

2本目は田中景氏（以下、田中氏）の日本人キリスト教団体の「写真花嫁」たちへの教育活動。それを通して見る「写真花嫁」像に歴史的 분석を加えたものである。

3本目は北脇実代子氏（以下、北脇氏）の、日本に於けるYWCA資料を中心に横浜YWCAが取り組んだ移民の教育について、渡航婦人講習所の創設と背景を考察している。

3本の論文について、以下で詳細をまとめていく。

眞崎氏は「日本人移民渡米全盛期の「栞」：『渡米婦人心得』をめぐって」<sup>5)</sup>で、日本人移民女性の渡航前の状況と彼女たちに働きかけを行った横浜YWCAと、移民女性に配布された『渡米婦人心得』を軸に、初期移民男性の配偶者となるために渡米した女性達の「道しるべ」であった「栞」とは何かについて言及している。日米関係の悪化と排日問題に直面し、移民社会改善を説いた在米ジャーナリスト河上清の功績をかかげ、移民問題に本当に必要なのは民衆レベルの移民社会の改善であったと論じている。また、外交問題として重要な時期に移民女性を救うために活動したのは政府ではなく、民間の女性たちであったと結論付けている。桑港日本人YWCAも民間女性たちによる団体であり、眞崎氏が指摘する様に自らの働きかけで、日本人移民女性を支援していく団体である。

5) 眞崎睦子「日本人移民渡米全盛期の「栞」：『渡米婦人心得』をめぐって」『大阪大学言語文化学7』大阪大学、1998年、175-187頁

田中氏は「20世紀初頭の日本・カリフォルニア「写真花嫁」修業一日  
本人移民女性のジェンダーとクラスの形成―」<sup>6)</sup>の中で、日本人キリスト  
教団体の「写真花嫁」たちの教育活動に歴史的分析を加え、各団体の教  
育方針や渡米女性に見られる「写真花嫁」像を考察している。各団体の  
中でも桑港日本人YWCAと力行女学校で行われた、渡米女性のための  
教育活動を分析の対象としている。設立目的や活動内容などに言及しつ  
つ、両団体の移民女性達に対する厳しい評価とそれに伴う教育事業、特  
に両団体に共通する点である精神修養の側面に着目し、修身を渡米日本  
人女性の倫理教育の基盤としていた点を指摘している。この修身教育こ  
そ「写真花嫁」を良妻賢母として、均質化するための手段と捉えている。

また、力行会の行った厳しい選抜試験と長期に及ぶ必修課目の履修を  
経て、教育された女性たちは在米日本人移民の妻として完璧であったと  
の自負が力行会創設者の島貫にあった事を指摘している。それゆえに、  
力行女学校の学生と在米日本人移民社会との結婚仲介を行い、日本で婚  
期を逃した女性たちにとって栄転の機会を与えてくれる場所に成り得た  
のだとしている。

日本人キリスト教団体の渡米日本人女性のジェンダー規範は、アメリ  
カ社会に対しては近代的で西洋化された独立した日本人女性だと印象付  
けると同時に、日本人生産者の妻として慎ましく従順な単一化された集  
団を在米日本人コミュニティの中に作り上げるという二面性を内包し  
たものであったと結論づけている。

北脇氏は本稿で核となる桑港日本人基督教女子青年会と結びつきの強  
かった、横浜YWCAについて「日本人移民女性を教育すること：1910  
年代における横浜YWCAの試み」<sup>7)</sup>で論じている。北脇氏は日本に於け  
るYWCA資料を中心に、横浜YWCAが取り組んだ移民の教育について、  
横浜YWCAが創設を後押しした渡航婦人講習所について創設の背景を  
考察している。

日本人排斥の動きが強まる中、日本人移民社会指導者による「改良」  
という名の米化運動と日本人知識人たちによる移民対策、外務省の働き

---

6) 前掲注2 参照

7) 北脇実代子「日本人移民女性を教育すること：1910年代における横浜YWCAの  
試み（研究ノート）」『研究紀要 CARITAS 第45号』、カリタス女子短期大学、  
2011年3月1日、23-33頁

かけなどが活発になる。渡米婦人講習所はこの様な状況の中、1915年に河井道子（以下、道子）が米国YWCAの要請に応じ、米国西海岸の実情を視察した事により急速に設立に向かっていく。

北協氏は渡米婦人講習所を知識階級の教養と経験を活かし、移民教育にあたった事は評価できるが、実際の日本人移民社会にはそぐわない理想像を構築したまでにすぎないとしている。

桑港日本人YWCAについての先行研究は他にもあるが、その多くがYWCAの機関誌『明治の女子<sup>8)</sup>』『女子青年界<sup>9)</sup>』や、桑港日本人YWCAの周年記念誌『回顧二十年<sup>10)</sup>』の情報により描かれてきた。数ある先行研究の中でこれら史料が幾度となく使われ、研究されてきている。これらの史料は雑誌として発行されているため、非常に読みやすく史料として用い易い。しかし、その正確性や制作者にまで注意を払っていないため、史実との整合性や裏付けがなされていない現状もある。

本稿では先行研究で用いられてこなかった史資料、桑港日本人YWCAの総委員長であった余奈子の日記、手紙、桑港日本人YWCA創設に寄与した伝道団の機関誌『新天地<sup>11)</sup>』から設立当時の桑港日本人YWCAの姿をなるべく詳細に時間軸を正確に、解明していくものである。

### YWCAの日本での発足と初期活動

そもそも、YWCAとはどのような団体なのか。1905年7月1日から『明治の女子』に「基督教女子青年会とは何ぞや」という記事が4回に渡って連載されている。第1回は青年会の成立と発展について、第2回から米英の女子青年会について掲載されている。

その連載によると、女子青年会は欧米に於ける世界的大運動の機関にして女子基督教信者が一般の女子青年を基督教に導くために設けたものである。

1855年頃英国人婦人が女子の感化力が偉大である事を信じて、婦人会

8)『明治の女子. 復刻版』日本基督教女子青年会、不二出版、1992年

9)『女子青年界：日本YWCA機関誌. 復刻版』不二出版、1992年4月～1994年1月

10)『回顧二十年』桑港日本人基督教女子青年会、1932年10月5日、Abiko Family Papers（以下、AFP）Box11 Folder 6に収録

11)『新天地』新天地社、1912年1月～1914年1月、3巻1號（明45. 1. 20）～5巻1號（大3. 1. 1）、同志社大学人文学研究所蔵

を組織する。同年、地方よりロンドンに職を求めて来る青年女子のために寄宿所を創設する。この活動をしていたのが、リチャード氏と青年女子祈祷同盟の創設者ロバート嬢であり、2人はお互いの事業を合併し、女子基督教青年会と改め活動を始める事となる。

英国に於いての発展は目覚ましく、ロンドンの一軒家からスタートした同会も1905年には160の支部を有するまでになっている。支援は看護・教師・工女、その他各種の職業に従事する青年女子に対して広く施された。

女子青年会の寄宿舎は英国のやや大都市といわれる所にはすべて設備され、そこでは読書・裁縫・速記術・文学など教育的事業が行われていた。

また、注目すべきは外国から職を求めてロンドンに来る青年女子のために案内所を設け、信用ある雇主の紹介を行っている事である。旅行者保護会を設け、英国内の旅行、外国より英国への入国、英国から外国への出国をする婦人を保護している。大きな駅や港に女子基督教青年会の徽章をつけた婦人を配し、女性乗客に対して様々な便宜を与えていた。

万国基督教女子青年会において、英国と双璧を為していた米国の女子基督教青年会は1886年合衆国西部の一大学の青年女子6名が、堅確なる希望と目的を以て団結したのが始まりである<sup>12)</sup>。同時期に同校において基督教青年会が組織されており、互いにその目的の一致と等しき使命を全うすべきと感じ、組織したのが始まりである。その後米国西部の各大学を始め全米に拡大していった。学生だけではなく、様々な職業に従事する青年女子を包括しながら活動範囲を拡張していった。

英米の活動が世界各地に広がりを見せ、1894年には世界YWCAが組織される。ミッショナリームーブメントと連動し活動の場を拡大していく。

1897年、日本でも日本学生YMCA同盟が発足。これにより全国規模の大学伝道活動が起こる。1900年には世界YWCAの総幹事A.M.レイノルズが来日。彼女は日本と中国で過酷労働下の女工の現状を視察する。1904年、日本ではYWCAが組織される前に聖書研究の機関誌『明治の女子』が創刊される。

12) 「基督教女子青年会とは何ぞや (三)」『明治の女子』第2巻第5号、1905年9月1日

1905年には日本YWCAが正式に発足、初期構成員は津田梅子（以下、梅子）、道子ら6名の日本人と14名の外国人教会婦人であった。しかし、日本人のために活動する団体として発足したにも関わらず、構成員の多くは外国人教会婦人であった。日本人が主体的に同朋女性に支援を行う事こそ重要と考え、1ヶ月後、梅子を中心として日本人のみで構成された東京YWCAが発足する。女性教育者・キリスト教界の指導者・政界婦人を構成員としていた。

日本YWCAは外国人主導運営であり、ナショナルYWCAとして機関誌の刊行や夏期修養会の開催など全国規模の事業を担当した。

東京YWCAは日本人が運営し、地域的な諸問題・女工の待遇改善・保育・授産所・職業紹介・震災救護など具体的事業をもって対処した他、寄宿舎事業を早い段階から展開し、日本人女性の拠り所としての活動を行っていた。

東京YWCAは独自に教育事業を行い、教養教育や専門的職業教育や自治的集団「クラブ」活動を展開する。クラブ活動は会員の委員としての素質を磨く場となっていく。また、YWCAの会員は恩恵を受恵するのではなく、運動推進者であり、支援者である事を求められていた<sup>13)</sup>。各会員が自覚を持ち、会費・寄附・事業・催事などの収入を生み出し独立採算の原則を堅持していた。余奈子の日記を読んでいると寄宿舎などは借家ではなく、YWCAの固定財産として保有しており、安定した事業展開を行えた要因はこの様な所にも見る事ができる。

1906年、日本YWCAは諸外国のYWCAが重要視してきた修養会を開催する。この修養会には余奈子も役員として参加していた。1913年に一時帰国した際も、夏期修養会に参加し、「加州問題在米日本人婦人について」と題した講話をしている<sup>14)</sup>。1906年、日本YWCAと東京YWCAは世界YWCAに加盟する。余奈子の日記の中にはYWCA活動に関する記載も多く、姉梅子の補佐をしながら日本のYWCA事業の渦中で、実際に活動を行いYWCAの精神や活動の手段、事業の展開などを学んだものと思われる。

13) 中本かほる「女子青年教育機関としてのYWCAの定着過程—1920年代の日本YWCAと東京YWCAの動きを中心として—」『東洋大学大学院紀要48』東洋大学大学院2011年、405—421頁

14) 「消息来往 安孫子夫人の出発」『女子青年界』第10巻第9号、1913年10月1日



## 第2章 桑港日本人YWCAの設立過程

本章では桑港日本人YWCAの設立を中心に論じていく。はじめに桑港日本人YWCA設立を発起し、開会まで導いた伝道団について吉田亮氏<sup>15)</sup>（以下、吉田氏）の研究と機関誌『新天地』を参考にしながら、団体の特性や活動について述べる。

続いて、桑港YWCAの設立過程について、余奈子の日記、『新天地』を中心史料として時系列でまとめていく。また、『新天地』は実際の記事画像を掲載している。

### 伝道団とは如何なる団体か

伝道団の機関誌『新天地』には以下の記述がある。

中加北加の各派教会と教役者とを網羅し、打て一団となせるものは我が伝道団である。未曾て福音の伝わらざりし僻地にまで、巡回伝道者を送りて、精神界の飢渴を医せんと試みつつあるは、吾が伝道団である。北加基督教同盟会が産み出した伝道団は、今や北加基督教同盟と合同して、其外観に於ても実質に於ても有力なる一団となった。

『新天地』（1912年2月1日）1面

「新天地 伝道団第二回評議委員会」より

1912年の伝道団は自らを北カリフォルニア州の基督教教界において概観と実質において有力なる一団と記している。

吉田氏は伝道団を最も組織化された伝導教育エージェントであると評している。伝道団を含め、1910年代のカリフォルニアの日本人移民キリスト教会については吉田氏の研究に詳しいので以下参考にしながら、伝道団について述べていく。

伝導団は矯風会活動を中心にカリフォルニア州社会における革新主義者、基督教会を中心とした道徳改良運動の実施を行っていた。具体的には飲酒・賭博・売春を排除する事で日本人の「同化」能力をアメリカ社

15) 吉田亮「1910年代カリフォルニア日本人移民キリスト教会の越境的リーダーシップ」『移民研究年報第17号』日本移民学会、2011年3月、3-21頁

会に明示し、排日運動の鎮静化を目論んでいた。1913年には土地法問題に呼応して、排日対策の啓発運動・伝導教育活動に力を入れている。また、伝導教育のために日本人教会牧師を積極的に招聘している。

吉田氏は伝導団について、日本政府機関や宗教本山から統制を受ける事なく、米国社会の基督教諸派に所属し、諸派の境界政治の有様に差はあるがその指導下にある移民団体であると位置づけている。

そして排日運動対策として講じたのが定住戦略であり、これを成功に導くため日本政府と日本領事館に働きかけ日本人会を発足させる。中心となって活動していたのが余奈子の夫、久太郎である。

吉田氏は日本人による教会形成について、各教会は少数派集団がアメリカ社会で生き抜くための有効・有益な資源を提供するエージェントであり、日本人諸団体との連携のもと、母教派からの影響を受けず、自立性のある活動を展開。また、母教派を通じてホスト社会の資源を活用でき、日本人集団の存在感をホスト社会にアピールしていたとする。

伝道団は女性による教会団体の必要を感じ、その発起を在米日本人女性達に託す事にする。この働き掛けこそが、桑港日本人YWCAの始まりである。続いて、桑港日本人YWCAの成立過程について述べていく。

### 桑港日本人YWCAの設立過程

桑港日本人YWCAはいかにして創設されたのか。本稿では、余奈子の日記と伝道団の機関誌『新天地』からその過程を明らかにしていく。

従来の研究では桑港日本人YWCAの成立については創設20周年の記念誌『回顧二十年』を中心の史料と捉え、それ以上の詳細な検討がなされていなかった。

しかし、この『回顧二十年』の編纂をした当時の役員名を見ていくと、創設当時に事業に関わっていた人物は遠藤てい子のみである。そのためか、表紙をめくった1ページ目の桑港日本人基督教女子青年会会長藤田邦子の文章に誤植がある。1行目創立発会式は1912年7月20日ではなく、1912年7月25日である。

またこの序文には設立の発端となった伝道団の事は一切触れられていない。

以下、余奈子の日記と伝道団機関誌『新天地』の重要な部分を抜粋し成立過程と関係人物について明確にし、先行研究だけでは分からなかつ

た日本人による初めての在米YWCAの設立を追っていきたい。『新天地』の記事抜書と余奈子の日記を、時系列に並べ『新天地』の記事には（●）を、余奈子の日記には（○）を文頭につけ区別している。なお余奈子の日記については1912年11月19日（火）までだが、流れが分かりやすいように以下に表①にしているので、参考としてほしい。また、桑港日本人YWCA 発起メンバーを表②としてまとめているのであわせて参照してほしい。

## 12 安孫子家文書から見る桑港日本人YWCAの設立過程

表①

1912年 (M45年) 月・日・曜日	余奈子日記記事事項
2月5日 (月)	久太郎は伝道団の歓迎会と評議員会があり出席。
2月6日 (火)	夜、婦人問題特別委員の森淳吉牧師来訪。女子青年会の談あり。
3月14日 (木)	午後より訪問に出かける。第一に美以教会の小室牧師夫人、富士山ホテルに小林徳子 (旧加藤) 夫人訪問。 大久保夫人・宮崎夫人も訪問する。
3月19日 (火)	ミス・ストージと女子青年会の話 (ホームの話)
3月26日 (火)	大久保牧師・小林夫妻と伝道団と女子青年会のことについて話合う。
3月27日 (水)	リフォームド教会にて婦人集会あり。宮沢・恭雄同伴にて出席。
3月29日 (金)	ミス・ジョーンズに伝道団の女子青年会組織について話をする。市の青年会に属す、属せざるに関わらず助力する。
3月30日 (土)	午後2時より伝道団主催の女子青年会設立についての相談会あり。出席者は以下の通り。 伝道団員：宮崎・森・野崎・小平・森下・安孫子 婦人たち：大久保・末広・宮崎・小林・井木・小平・佐野・大沢・森下・余奈子 (計10名)
4月14日 (日)	ベインメソジスト教会にて伝道団員と女子青年会の相談会に参加。 桑港日本人YWCAは伝道団の経費にて組織する。発会にあたり、キリスト教婦人を招き、集会を催すことが決定。 小室・宮崎両牧師の説明あり。小室議長による規則についての討議。議員選定委員選出 (余奈子・宮崎・佐野・井木・末広夫人)。選挙総数は30名。
4月17日 (水)	午後2時リフォームド教会で女子青年会準備委員会開催。出席者は12、3名。役員選挙あり。 会長：余奈子 (辞退)、副会長：小室、会計：宮崎、幹事：小林、寄宿舎監督：大久保 (音)
4月27日 (土)	会長問題・寄宿舎問題につき久太郎からの質問を受ける。
5月8日 (水)	今日より女子青年会の運動にかからん…。事務所は富士山ホテル。会計役を宮崎氏に勤めるも辞退。
5月10日 (金)	発会式の相談。小室夫妻に会長問題について相談。森下・牛島に就任を勤めてはとの話出る。
5月13日 (月)	領事館・三井等訪問し、女子青年会の設立の事について話す。
5月14日 (火)	午後2時より伝道団事務所に準備委員会あり。事案：発会式臨席者の決定 (小室・大久保・小林・森下・佐野・宮崎・末広・福島・余奈子)、帝国ホテルの家具を400ドルで買い受ける事が決定する。
5月15日 (水)	ミス・フォープスと女子青年会の話あり。会場の話となり、YWCAを勧められる。夜、再びフォープスと話し合い女子青年会館を発会式会場とする。
5月16日 (木)	大久保夫人と共に新世界社の池田氏訪問し、女子青年会への助力を依頼。 大久保夫人・小林夫人と会長問題研究をし、森下夫人を候補とする。
5月21日 (火)	宮崎夫妻を訪問し、会計就任を打診。
5月23日 (木)	カリフォルニア州プレゼントンで開会中の女子青年会大会へ出席。
5月26日 (日)	日本の女子青年会に関わる夫人とアメリカYWCAメンバーとの会見機会として茶話会の開催を牛嶋さんへ依頼。
5月27日 (月)	牛嶋氏50ドル、領事10ドルをそれぞれ寄附。
5月28日 (火)	青木夫人・ドクトルに女子青年会への寄附を依頼。
5月29日 (水)	第一組合教会主催のYWCAへ出席。
5月31日 (金)	ミス・カンデー、ミス・テラー紹介のため茶話会催す。女子青年会本部についての説明。寄附募集の話あり。 米国籍出席者：ミセス・メリット、ミス・フォープス、ミス・ニコラス 日本人側出席：宮崎・大久保・小林・小室・安孫子夫妻、佐野夫人
6月8日 (土)	ガープ街に女子青年会会館がある。
6月19日 (水)	女子青年会館にて3時より役員会あり。小室・大久保・小林・森下氏 (夫人代理) 参加。寄附金募集の件、寄宿舎の規定などについて討議。
7月10日 (水)	午後2時半より女子青年会発会式準備委員会へ出席。City YWCAに25日の事を依頼に行く。
7月12日 (金)	YWCAに行き、ミス・フォープスと発会式について打ち合わせる。
7月19日 (金)	英字の招待状発送。
7月25日 (水)	発会式開催
9月10日 (火)	女子青年会役員会あり (小室・森下・宮崎・余奈子)。午後2時半から第1回英語研究会あり。出席者10名 (小室・宮崎・森下・小林・大久保わかこ・中林・青木・森山・福島・余奈子)
9月17日 (火)	第2回英語研究会。ミス・フォープスの紹介の仕方などを指導する。新メンバー (名尾・三保・岡部・水原) + 中村・青木・福島・大久保・小林・余奈子で参加。
10月8日 (火)	日本女子青年会よりの来状 (10月7日付) を小林夫人に見せる。 英語研究会あり。米国人の階級について。大久保・三保・福島・小林・余奈子参加。
10月15日 (火)	英語研究会・フォープス夫人御出で。福島・平田・青木・大久保牧師・大久保夫人・余奈子
10月22日 (火)	雨天のため英語研究会はなし。
10月29日 (火)	汽車にて桑港のYWCA相談会に参加。大久保・森下も参加。
11月5日 (火)	選挙のため休日となる。よって青年会も休み。
11月7日 (木)	来週の話演会について小室・小林と相談。
11月12日 (火)	英語研究会。青木・大久保・余奈子
11月13日 (水)	第1回講演会あり。題「婦人の勢力」森下夫人司会。60名程参加。
11月19日 (火)	修養部に慈恵会の役員会あり。墓地移転の問題ありて、藤原・黒沢・内田・中林・寺沢・野沢・市川・余奈子参加。 その後、英語研究会。

表②

参考：『回顧二十年』より（AFPD：Box11 Folder 6）、『新天地』	
桑港日本人YWCA（1912年4月本会創立）	
発起人	配 偶 者
花村高子	
谷道子	
竹下千代野子	
牛島しめ子	
内海しげ子	
井木律子	
大久保音羽子 （婦人矯風会会長）	大久保眞次郎（伝道団巡回伝道師）
大久保和歌子	
大澤満壽子	
前野田鶴代子	
福島英子	福島熊蔵（桑港組合教会）
小室兼子（会長）	小室篤次（『新天地』主筆・桑港美以教会牧師）
木庭ふく子	木庭愛二（バカビル美以教会牧師）
小平照子	
安孫子余奈子（総委員長）	安孫子久太郎（伝道団常置員）
佐野梅子	
宮崎島子	宮崎小八郎（桑港長老会教会牧師）
森下ひろ子（副会長）	森下亀太郎
末廣花子	末廣浅次郎
杉村たけ子	

\*\*\*\*\*

1912年2月5日（月） 伝道団評議員会の開催

○久太郎は伝道団の歓迎会と評議員会があり出席。

●伝道団評議員会歓迎会

伝道団評議員会に出席する牧師及び評議員を2月5日夜桑港組合教会に於いて歓迎す。「伝道団報」『新天地』、第3巻第3号1912年3月1日、5－6頁

\*\*\*\*\*

1912年2月6日（火） 桑港日本人YWCA設立について余奈子へ初めての談話

○夜、婦人問題特別委員の森淳吉牧師来訪。女子青年会の談あり。

●伝道団第2回評議員会で婦人問題特別委員が選定される

1、日本より渡米する婦人の問題に就き懇談の結果特別委員を挙げ之に児童問題の委員を加ふる事となれり、其の委員は廣田氏委員長、宮崎小八郎、安孫子久太郎、小室篤次、小平国雄、梶塚敬次郎の6名会合熟議の末、左の決議案を提出せり。「吾が伝道団は桑港に日本女子青年会の必要を認め之が実行を期する為め、5名の委員を挙げ」。委員長廣田氏説明し、会計の事に就いては宮崎氏説明し、小室・安孫子の両氏も亦、説明する所ありたり、大多数にて可決、5名の委員は議長の指名とす。

1、議長は婦人問題特別委員5名を左記の通り指名す。安孫子久太郎・宮崎小八郎・前川眞二郎・森淳吉・小室篤次

◎基督教女子青年会創立委員会事務所に開会出席者は廣田・大久保・森下・伊東等の幹部員に安孫子・小室・宮崎等の委員にして小室氏を委員長に挙げ、森氏を書記に推選し百方協議の末、先ず規則の案を作る事となり、宮崎・小室・安孫子の三氏を起草委員に選びて閉会。

\*\*\*\*\*

1912年 3 月30日（土）女子青年会設立についての協議会開催

○午後 2 時より伝道団主催の女子青年会設立についての相談会あり。

出席者は以下の通り。

伝道団員：宮崎・森・野崎・小平・森下・安孫子

婦人たち：大久保・末広・宮崎・小林・井木・小平・佐野・大沢・  
森下・余奈子（計10名）

●教会婦人代表者・有志婦人信徒の会合

◎女子青年会設立に關する協議  
會を前後四回開催し、其實行方  
針も定まりたれば三月三十日午後  
リフオムド教會に於て各教會婦人  
代表者及び有志婦人信徒の會合を  
なせる結果四月十四日午後二時桑  
港美以教會に於て桑澤婦人信徒大  
會を開催し之が設立及び組織を了  
すべし當日は諸姉洩れなく出席せ  
られんことを切望す

『新天地』1912年 4 月 1 日、6 頁

\*\*\*\*\*

# 1912年4月14日（日）・17日（水）女子青年会組織

## ●評議員・役員選挙・委員の選定 『新天地』1912年5月1日、6頁

○女子青年会設立及組織 評議員会の決議  
 に基づき二月以來所議と熟議を以て進行せる  
 結果遂に四月十四日桑港美以教會に於て基  
 督教婦人大會を開催し、來會者四十餘名全會  
 一致を以て其設立及組織を決議し規則の編  
 成及評議員の選舉を了せり、越つて十七日  
 フォームド教會に於て評議員會を開き役員  
 の推挙及び委員の推定を了せり  
 會長 牛島しめ子 副會長 小室 兼子  
 會計 宮崎しめ子 幹事 小林さく子  
 寄宿舍監督 大久保音羽子  
 評議員三十名左の部門を分擔す  
 ▲修養部 小室兼子 小平照子 高橋しづ子  
 中村裕子  
 ▲社交部 安孫子餘奈子 千葉ひろ子  
 内海しげ子 小林さく子  
 ▲慈善部 井木律子 杉村竹子 佐藤榮子  
 花村高子  
 ▲教育部 佐野梅子 大久保わか子  
 谷口菊子 竹下千代野子  
 ▲家庭工藝部 末廣花子 前野田鶴代子  
 森山れき子  
 ▲寄宿舍部 大久保音羽子 福島英子  
 宮崎鳴子 木庭福子  
 ▲會計部 牛島しめ子 森下廣子 和佐倫子  
 ▲文書課 寺澤福子 青戸道子 大澤よき子  
 寄宿舍創設のため七名の委員を擧げて之に  
 一任せり  
 發會式は五月廿八日地久節當日舉行すべく  
 左の準備委員を擧げたり  
 大久保音羽子、佐野小平、花村末廣、福島  
 宮崎、小室、森、竹下、井木、小林  
 顧問として傳道團幹部員諸氏を推薦せり

## ○4月14日（日）バインメソジスト教会にて伝道団員と女子青年会の相談会に参加

桑港日本人YWCAは伝道団の経費にて組織する。発会にあたりキリスト教婦人を招き、集會を催すことが決定。小室・宮崎両牧師の説明あり。小室議長による規則についての討議。議員選定委員選出（余奈子・宮崎・佐野・井木・末広夫人）。選挙総数は30名。

## ○4月17日（水）午後2時リフォームド教會で女子青年会準備委員会開催 出席者は12、3名。役員選挙あり。

会長：余奈子（辞退）、副会長：小室、會計：宮崎、幹事：小林、寄宿舍監督：大久保音羽

→人事選定はその後難航し、余奈子と久太郎は人事について様々な人物に打診する。

（余奈子日記に見られる人事に関する記載）

5月8日（水）宮崎夫人會計辞任

5月10日（金）久太郎と共に小室夫妻に会長問題を相談する。

小林夫人は牛嶋さんに勧めてはどうかと提案。

5月16日（木）大久保夫人と小林夫人と会長問題研究をし、森下夫人を候補にたてる。

5月20日（月）久太郎と小室夫妻を訪問。会長問題を相談し、小室夫人に勧める。

5月21日（火）宮崎牧師夫妻を訪問し會計職就任を依頼。



最終的な人事は小室兼子を会長、森下ひろ子を副会長、安孫子余奈子を総委員長として決着した。

\*\*\*\*\*

1912年 5 月 7 日（火）伝道団常置委員会の開催

○夫は伝道団の常任委員会あり終日不在。夜遅く帰宅。

●伝道団の常置委員会にて、女子青年会設立の報告と女子青年会評議員会の顧問は伝道団幹部である事が報告される。

常置委員会

五月七、八の兩日桑港リフオムド  
教會に於て本年度第二回常置委員  
會を開く

七日午前九時より祈禱會、司會者  
梶塚敬次郎氏、獎勵者吉村末吉氏  
外數氏の祈禱あり、午前九時三十  
分議事、議長廣田善朗氏、書記小  
林政助氏、出席者左の如し

廣田善朗 宮崎小八郎 小室篤次 大久保  
眞次郎 吉村末吉 森淳吉 小平國雄 梶  
塚敬次郎 福島熊藏 前川眞次郎 北澤鐵  
治 安孫子久太郎 森下龜太郎 小林政助  
の十四名、欠席者 太田義三郎 田嶋堅岡

一會計及び事務の報告 小林政助  
一新天地會計の報告 同  
一傳道の報告 大久保眞次郎  
一女子青年會設立に關する報告 小室篤次郎

一女子青年會評議員會に於て推薦  
せる顧問は傳道團幹部としての  
ものなる事

『新天地』、1912年 6 月 1 日、12頁

\*\*\*\*\*

1912年 5 月 14 日（火）女子青年會館の決定→ 6 月 7 日（金）新會館へ移転

○午後 2 時より伝道団事務所にて準備委員会あり。

發會式臨席者の決定（小室・大久保・小林・森下・佐野・宮崎・末  
広・福島・余奈子）、帝国ホテルの家具を400ドルで買い受ける事が決  
定する。

●女子青年会館の場所が（帝国ホテルの跡地）に決定した事の報告記事

女子青年会館  
街一〇〇と内定し、六月上旬開館の運びに至るべし

●女子青年会事務所の移転の記事

買入れ、元の帝國ホテルを借入れ、既に、本會寄宿舎を設くるに至り、六月七日、ここに移轉

『新天地』、1912年6月1日、5頁

『新天地』、1912年8月1日、3頁

\*\*\*\*\*

1912年5月～6月 余奈子の日記に見る女子青年会資金寄附活動記録

- ・ 5月22日（水）  
組合教会評議員会に出席（小室・小林・千葉・井木・福嶋・大久保・佐野・宮崎・大津・末弘・余奈子）する。寄附金募集の件、寄宿舎の事を報知する。
- ・ 5月23日（木）～24日（金）  
女子青年会大会に出席する。
- ・ 5月27日（月）  
牛嶋氏50ドル、領事10ドルを寄附。
- ・ 5月28日（火）  
青木夫人・橋本夫人・ドクトル・藤原さん・中林夫人・ドクトル・小林夫人に寄附金の事を依頼する。
- ・ 5月31日（金）  
日米両国夫人の顔合わせも兼ねて茶話会を開催。
- ・ 6月18日（火）  
青木氏ご夫妻から10ドルの寄附。青年会館へも立ち寄られる。午後から寄附の勧誘に出向く。

- ・ 6月19日（水）  
3時より役員会があり、小室・大久保・小林・森下夫人の代理人が出席し、寄附金募集の件と、寄宿舍規定の発会式の件などを話し合う。
- ・ 6月20日（木）  
寄附金募集に行く。益子夫人5ドル、松本夫人3ドルを寄附。
- ・ 6月21日（金）  
寄附の依頼に名尾氏を訪ねるも不在。大津氏5ドルを寄附。
- ・ 6月22日（土）  
木庭氏より大成堂より寄附の報告を受ける。
- ・ 6月23日（日）  
益子氏よりデー■ーク屋一軒青年会の寄附に廻るとの事で2ドル23セント持参される。
- ・ 6月24日（月）  
名尾さんから3ドルの寄附
- ・ 6月25日（火）  
宮沢を寄附金集めに出向かせる。
- ・ 6月26日（水）田頭さんに寄附金2, 3件の募集について依頼する。

余奈子は女子青年会設立・設立資金寄附を様々な人に依頼している。『新天地』の記事によれば他のメンバーの働きもあり、設立に必要なだった500ドルを僅か2ヶ月で集めている。

下記は設立費寄附金申込者芳名（第2回）一覧である。第1回の記事は見つからなかったが、設立メンバーを含め多くの日本人、特に女性が寄附をしている事が分かる。

設立費寄附金申込者芳名（第2回） （七月廿六日迄の分）	
金二十五郎宛 安孫子久太郎 藤平 純三 水島 雄治	金二十五郎宛 藤平 純三 水島 雄治
金二十郎宛 谷口 文彦 森 淳吉 中川 芳南 白井 照子 ミズホーナス 星山彌十郎 共同消費會社	金二十郎宛 谷口 文彦 森 淳吉 中川 芳南 白井 照子 ミズホーナス 星山彌十郎 共同消費會社
金三郎宛 駒田 氏 和佐 倫子 崎山昇服店 佐藤 榮子 元吉 徳次郎 平田 姉 真水 延輔	金三郎宛 駒田 氏 和佐 倫子 崎山昇服店 佐藤 榮子 元吉 徳次郎 平田 姉 真水 延輔
金二弗宛 松崎 夫人 元吉 徳次郎 無名氏 持留 敬管 伊藤 鈴代子 石井 けい子 森田 けい子 鈴木 宇兵衛 片山 松枝 山城屋 米吉 空村 さと子	金二弗宛 松崎 夫人 元吉 徳次郎 無名氏 持留 敬管 伊藤 鈴代子 石井 けい子 森田 けい子 鈴木 宇兵衛 片山 松枝 山城屋 米吉 空村 さと子
金一弗宛 三谷 商店 前本 商店 小畑 夫人 坂城 けん子 中村 盛一 杉野 繁一 角 さわ子 佐藤 貞子 五十嵐 貞子 野村 さと子 福留 さと子 水頭 隆次郎 影山 才一郎 三宅 徳子 中村 勝一 中村 勝一 大河 貴太郎 井出 商店 金井 八郎 林 平助	金一弗宛 三谷 商店 前本 商店 小畑 夫人 坂城 けん子 中村 盛一 杉野 繁一 角 さわ子 佐藤 貞子 五十嵐 貞子 野村 さと子 福留 さと子 水頭 隆次郎 影山 才一郎 三宅 徳子 中村 勝一 中村 勝一 大河 貴太郎 井出 商店 金井 八郎 林 平助
金一弗宛 三谷 商店 前本 商店 小畑 夫人 坂城 けん子 中村 盛一 杉野 繁一 角 さわ子 佐藤 貞子 五十嵐 貞子 野村 さと子 福留 さと子 水頭 隆次郎 影山 才一郎 三宅 徳子 中村 勝一 中村 勝一 大河 貴太郎 井出 商店 金井 八郎 林 平助	金一弗宛 三谷 商店 前本 商店 小畑 夫人 坂城 けん子 中村 盛一 杉野 繁一 角 さわ子 佐藤 貞子 五十嵐 貞子 野村 さと子 福留 さと子 水頭 隆次郎 影山 才一郎 三宅 徳子 中村 勝一 中村 勝一 大河 貴太郎 井出 商店 金井 八郎 林 平助

\*\*\*\*\*

1912年7月 女子青年会発会式に向け

○女子青年会の発会に向けて7月18日（木）には和文の招待状を発送、翌19日（金）にも英字で招待状を発送。当日に向けて準備している事も日記には記されている。

\*\*\*\*\*

1912年7月25日 女子青年会発会式

○女子青年会の発会式、青年会館にて午後2時より開会する。小室夫人が司会、余奈子は開会の辞、小林夫人は報告、末廣夫人が英語の挨拶、祝辞は永井松三領事、大久保夫人、伝道团团長廣田牧師、ミセス・メリット、ミセス・ソルストンが行った。集会者数は150人で盛会であった。式後にはガーフ街の新寄宿舍にて茶菓子による饗応があった。小池夫人、井木夫人、井木嬢も参加。米国婦人は今回の新設備について大いに喜んでくれた。

# ●『新天地』発会式について

一、讃美歌（百六十二番） 司會者 小室 兼 子  
二、誓詞朗誦 宮崎 鶴子  
三、祈禱 森下 廣子  
四、開會の辭 安孫子 餘奈子  
五、報告 小林 徳子  
六、挨拶（英語） 末廣 花子  
七、ヒアリング 米、ダアン、ウィンクリ  
八、祝辭 總領事 永井松三 君  
九、同 桑港基督教女子青年會會長  
十、同 ミセス・ソルストン  
十一、唱 米、ダアン、ウィンクリ  
十二、祝辭 米、ダアン、ウィンクリ  
十三、同 外務部長 ミセス・メリット  
十四、同 婦人地獄會長 マーメ  
十五、同 傳道團々長 廣田 牧師  
十六、同 大久保音羽夫人  
十七、同 廣田 牧師  
十八、同 宮崎 鶴子  
十九、同 牧師

女子青年會發會式  
本年二月傳道團評議員會に於て設立を決議せし以來、至極圓滿に實行の歩を進め、遂に會館の設置をも了するに到れる女子青年會は、七月廿五日桑港米人女子青年會館に於て、左の順序に依り、發會式を舉行せり

來會者は日米兩國の淑女紳士凡百五十餘名、來賓祝辭中永井總領事は、女子青年會の事業は常に在米同胞社會に大なる貢獻をなすに止まらず、延ひて故國の社會風教にも感化刺激を與ふるに至るべし、と會の前途を祝し、米人會衆に對し英語もて在米日本人が如何に社會の廓清に努力せるかを説明し、女子青年會の設立が時宜に適應せるを稱せらる。米人側の祝辭ソルストン、メリット兩夫人と深甚の同情を發表し、將來の協力提議を希望せられ。大久保夫人は婦人地獄會青年會と共同して社會的事業の衝に當らんことを希望せられ。廣田團長は英語にて、設立の成功を祝し、將來の發展を祈られたり

式後ガーフ街の新設會館に於て茶菓の饗應あり、兩國の兄弟姉妹關係を開きて、快談滑稽の時の移るを知らず、散會せるは六時なりき

會館内部の整理も了し、各種の設備も漸々進行し、事業も着々其緒に就くべし、殊に寄宿舍の設備は全く整ひ居れば、故國より、或は地方より來往の婦人方の宿泊、案内、通知其他の幹旋は何時にても應ずべしと

『新天地』、1912年8月1日、2頁



発会式についての余奈子日記の記述と『新天地』の発会式記事は合致している。『新天地』に掲載された「在米日本人基督教女子青年会」には、女子青年会の設立や設立に向けた困難、多方面からの資金援助、初期発起人メンバー、家屋についての記事を掲載している。

その中でも前頁掲載の『新天地』「其四 本会の希望」にて、桑港日本人YWCAは7つの希望を掲げている。(1) 女子教育の機関 (2) 婦人の寄宿舎 (3) 婦人の図書館 (4) 婦人の隠れ家 (5) 婦人の社交倶楽部 (6) 婦人のホーム (7) 白人青年会と連絡して、日米親善の媒となる。以上7つが、その後の桑港日本人YWCA活動の根幹となる。この7つがどの様に実現されるのかについては別稿で明らかにしたい。

桑港日本人YWCAは伝道団の働きかけにより、渡米日本人婦人たちが発起し地道な寄附募集活動と米国婦人たちとの協力のもと、徐々に設立に向けての準備がなされていった事が確認できた。

伝道団はなぜ1912年2月のタイミングで設立を促そうと考えたのか、会長小室兼子の記した『新天地』記事「其一設立の動機」に記されている。以下抜粋する。

渡米婦人の数、月毎に増加し、子女の数、従って多きを加ふ。婦人と小児の問題は我等の前途に横たわる焦眉の問題なり。是等の、必要に応ずべき、基督教主義の、団体の組織せられん事は吾も人も、希望する所なりければ、北加基督教々役者大会に、伝道団の議に上り、調査を重ね、衛恩義を尽せる後、基督教伝道団が、産婆の務をなして、やや難産なりしも、先づ先づ、世に出るに至れるなり。

『新天地』、1912年8月1日、3頁

と記されるように、日本人が移動を始めた事で生じた問題に対して早期に向き合い、解決へ導くために設立が発案されたのである。

2月5日の伝道団評議員会から婦人問題特別委員会が設置され、その日のうちに余奈子へ女子青年会の話が入る。一週間後には初期発起メンバーの中心となる小室夫人・小林夫人・大久保夫人・宮崎夫人に報告し、討議を重ねて設立まで徐々に歩んでいる。話の発端は伝道団であったものの、すぐに女性達が主体となって活動を始めている。

4月27日(土) 余奈子の日記には、久太郎から女子青年会の会長問題・

新寄宿舎問題について質問されている事が分かる。つまり、伝道団としては経営の主体はあくまでも婦人達である事を認識しながら助言や援助をおこなっていたのである。

21頁の『新天地』記事「其二 創立難」には、ミセス伝道団と基督教伝道団の付属機関として誤解をされていた事、日本人女性だけで移民社会における様々な事業に立ち向かう事の苦勞、女性蔑視などが重なっており困難な時期があった事が分かる。この困難に立ち向かったのが、表②に挙げた20名発起人メンバーの日本人女性である。彼女たちは日本人移民社会の中産階級に属し、夫は日本人移民社会での影響力を持つ、牧師、事業家、役人等である。余奈子の暮らしぶりを見ていると生活苦にあえいでいた訳ではない。

安武氏<sup>16)</sup>は北カリフォルニアに住む、日本人社会の女性達は様々な相違や不平等を内包する複雑な集団と表現し、この力関係が顕著な世界で生きた日系一世女性の社会構造を考察している。

日本人移民社会の指導者を夫に持つ多くの日本人教会婦人は娼婦や写真花嫁に対し、日本人社会の健全なる発展とそのイメージアップを重視していたため、賤業従事者を嫌悪していたと評価している。

桑港日本人YWCAは安武氏の指摘した様な観念を持って活動をしていたのだろうか。今回は創立について明らかにする事を本題としていたので踏み込んではいないが、彼女たちのこのような生活環境や水準が、活動を行っていく過程で変化し、実際の日本人移民社会で困難に直面する人々にどの様な影響を与えていったのかは今後更なる調査と考察が必要になる。

第2章では桑港日本人YWCAの設立過程を時間軸を中心にしながら、その準備期間に携わった人物を含め、余奈子の日記と伝道団機関誌『新天地』を史料にしながら整理した。

第3章ではこの準備期間と設立を経て、桑港日本人YWCAが行った活動とその問題点について考察していこうと思う。

---

16) 前掲註4 参照

### 第3章 桑港日本人YWCAの1912年～1913年にかけての初期活動について

余奈子の日記には、桑港日本人YWCA設立直後からしばらく桑港日本人YWCAの記載が見られなくなるが、2ヶ月後の1912年9月から、創設メンバーへの米国文化のレクチャーを主な活動とした英語研究会が開催された事を記している。これは毎週火曜日に開催される事となるが、早い段階で形骸化・出席者の固定化が目立つようになる。

役員活動は週2回程度開催だが不定期になっていく。また、議事録などが残っていないため、具体的にどのような決議がなされていたのかは不明である。設立当初ではないが、1917年からは『女子青年』という機関誌が発行されており<sup>17)</sup>、今後はその機関誌の調査も必須となる。

桑港日本人YWCAは日本YWCAと同様に、設立当初から婦人のための寄宿舎を所持していた。しかし、すぐに増設を目標とし、真面目な正しい婦人の宿泊所として渡米して来た日本人女性のために運営することを目指している。

1912年9月1日『女子青年界第9巻第9号』に「在米日本人基督教女子青年界創設の次第」と題した、道子に宛てた余奈子の私信が掲載される。その内容は、写真結婚で渡米してくる日本婦人に対し、米国風生活様式などの講習実施を目標としている事が書かれている。この活動が日本のYWCAと連携し事業化されるのは、1915年に道子が桑港の余奈子宅を訪れ、横浜YWCAとの移民事業の提携を結んでからとなる。

一方で在米日本人婦人たちのための社交倶楽部的役割として、音楽部を新設し教師を招聘している。定期的に音楽会も開催し、その収益を桑港日本人YWCAの活動費に充当していた。

『新天地』を読むだけでは桑港日本人YWCAの経営は軌道に乗り、一見すると問題が見られない。しかし開設直後から深刻な資金難に陥っており、その改善に向けての活動が1913年の余奈子寄附金集めへの帰国へと繋がっていく。創設初期の経営状態について『新天地』に載っていた会計報告から明らかにすると共に、その後の経営改善に向けての余奈子の日本帰国と、成果について久太郎から余奈子に宛てた手紙と余奈子の日記を用いながら明らかにする。

17) 前掲注10『回顧二十年』、4頁参照



## 桑港日本人YWCAの初期経営状態

以下の表①～⑦は『新天地』に記載されていた女子青年会の会計報告である。①女子青年会設立費会計報告、②～⑤女子青年会会計報告、⑥音楽会会計報告、⑦1913年度予算である。

①

女子青年会設立費会計報告 (1912年9月4日メ)		
	金額	備考
前月度メ切不足額	▲25.83ドル	
寄付金額収	24.25ドル	
差引不足金	▲1.58ドル	(本会計より支出)

②

女子青年会設立費会計報告 (1912年9月4日メ)		
	金額	備考
総収入額	170.48ドル	
支出総額	87.56ドル	
差引残金	82.92ドル	

③

女子青年会設立費会計報告 (1912年9月度)		
	金額	備考
総収入額	149.17ドル	(前回繰越金含)
支出総額	70.68ドル	
差引残金	78.19ドル	

④

女子青年会設立費会計報告 (1912年10・11・12月)		
	金額	備考
総収入額	311.19ドル	(繰越金78.49ドル含) +0.3ドル間違いか
支出総額	287.58ドル	
差引残金	23.61ドル	

⑤

女子青年会設立費会計報告 (1913年1・2・3月)		
	金額	備考
総収入額	525.36ドル	(前回繰越金含)
支出総額	376.63ドル	
差引残金	148.73ドル	

⑥

女子青年会設立費会計報告 (1913年1・2・3月)		
	金額	備考
音楽会総収入額	310.75ドル	
音楽会支出総額	63.55ドル	
音楽会差引残金	247.20ドル	

⑦

1913年度予算		
	金額	備考
総収入額	860ドル	会費350ドル 工芸部月謝10ドル 寄宿舎室料500ドル
支出総額	998.25ドル	青年会予算245.25ドル 寄宿舎予算753ドル
差引残金	▲138.25ドル	臨時収入要

初期桑港日本人YWCAの経営は綱渡り状態で、⑦1913年度予算に至っては試算の段階で差引残金がマイナスになっている。

1913年3月28日付の久太郎から余奈子への手紙の中で以下の指摘が見られる。

昨日女子青年会役員会を開き、重要の件討議せし由、音楽会の純利益二百五十弗以上なりしも毎月の経費不足の為め、既に数十弗を費

やし、現在手元金百八十弗内外の由。此分より大久保監督・小林幹事へ礼金として各三十五弗づつ進呈する事に相成候由。然る時は殘金僅かに百弗に過ぎず、洵に心細き次第候。何とか善後策を講ぜざれば前途悲觀せざるを得ざる事と存じ候。

下線部分にある様に、善後策を講ぜねば前途を悲觀せざるを得ない状況にまで経営が悪化していた。主な収益は会費、寄附、室賃料で、不定期に音楽会での収益があるものの、団体の財政を改善するほどの額ではない。このような状況に置かれた桑港日本人YWCAと余奈子は、日本で資金調達を画策する。1913年3月8日、余奈子は息子恭雄と共に日本へ帰国する。アメリカで生まれた恭雄を家族に見せる事、桑港日本人YWCAの資金調達のための帰国である。帰国後の余奈子は新渡戸稲造（以下、新渡戸）からの斡旋をうけながら、渋沢栄一・浅野総一郎<sup>18)</sup>・森村男爵<sup>19)</sup>・大倉孫兵衛<sup>20)</sup>・添田壽一<sup>21)</sup>等、財界人から桑港日本人YWCAのために1,500円<sup>22)</sup>の寄附金を集めるに至る。次頁の表③【余奈子の日記にみる、桑港日本人YWCAへの寄附金募集活動一覧】は余奈子の日記

18) 浅野総一郎…1848年3月10日－1930年11月9日、越中国水見郡菰田村（富山県氷見市）に生まれる。1876年、当時第一国立銀行頭取だった渋沢栄一と出会う。浅野にとって渋沢は生涯の恩人となる。1896年安田善次郎ら実業家の協力を得て東洋汽船株式会社を設立。横浜－桑港間を結ぶ。1908年大型貨客船建造重油焚きの天洋丸を進水させる。1918年浅野財閥を築く。

19) 6代目森村市左衛門…1839年－1919年、江戸京橋生まれ。1876年弟・豊と森村組を創立。同年佐藤百太郎（順天堂の創設者の長男）の世話で生糸貿易で有名になった新井領一郎・丸善店員の鈴木東一・三井組の伊達忠七とともにニューヨークで「日之出商会」を設立。1878年には弟・豊は単独で六番街238番館に「森村ブラザーズ」を設立。一太郎が日本で蒔絵や印籠などを調達し米国へ送っていた。また、義弟の大倉孫兵衛（大倉文二の義父）を引き入れて北海道から関西まで足を伸ばし仕入れを行っていた。日本陶器を設立し日本のセラミックの発展に貢献する。また、教育に力を入れ日本陶器に夜学を設けて従業員教育を行ったり、「森村豊明会」のもと、日本女子大や三輪田学園、高千穂学園の援助、森村学園の創立など女性教育を推進する。（参考：IRマガジン1999年4－5月号 Vol.37 野村インベスター・リレーションズ）

20) 大倉孫兵衛…1843年－1921年、3代目家業の絵草紙屋から独立し、大倉書店や大倉孫兵衛洋紙店を設立。森村市左衛門と出会い陶磁器の輸出を手がける。明治20年代以降、大正期に至るまで製陶業の近代化に尽力。日本陶器（ノリタケカンパニーリミテド）、大倉陶園・東洋陶器（TOTO）・日本碍子（日本ガイシ）設立に参加した。佐藤文二を養子にし、娘ミチと結婚させ、大倉孫兵衛に事業を引き継ぐ。（参考：公益財団法人大倉精神文化研究所 [http://www.okuraken.or.jp/kouenkai/ookura-kouen/ookura\\_kako/kouen\\_20/](http://www.okuraken.or.jp/kouenkai/ookura-kouen/ookura_kako/kouen_20/)）

表③【余奈子の日記にみる、桑港日本人YWCAへの寄附金募集活動一覧】

1913年（月日）	桑港日本人YWCA寄附金について余奈子日記記事事項
7月10日（木）	大倉家へ面会に行く。女子青年会の話になり、大倉文二氏から森村市左衛門氏への紹介状を貰う。
7月16日（水）	大隈重信伯爵家へ行き女子青年会について話をする。浅野総一郎氏への紹介状を貰う。
7月28日（月）	池上の今西夫人を訪問し、女子青年会の話をする、添野壽一氏を訪問する事について依頼をする。
8月6日（水）	新渡戸先生に手紙を書く。新井伯にあて、女子青年会についてお願いをする。
8月8日（金）	浅野総一郎氏に会見の約束があり、東洋汽船会社本社へ行く。浅野氏は不在であったが、4時に婦社との事で面会する。大隈伯爵からの紹介状を差し上げ、在米日本人女子青年会事業について陳情する。寄付金をご依頼する。今西夫人は同伴せず。近日中に同夫人からもお蔭め戴くことにする。
8月11日（月）	大倉氏と面会。
8月16日（土）	午後から、添田家及び沼野夫人を訪問する。
8月17日（日）	大倉氏へ森村市左衛門氏への訪問について電話にて相談する。鎌倉に行く事になっているので、訪問は中止する。
9月10日（水）	浅野氏へ手紙を書く。
9月11日（木）	夜、新渡戸稲造先生が女子英学塾へ来塾のため、会見して女子青年会の相談をする。
9月13日（土）	新渡戸先生に女子青年会の事について相談の電話をして、浅野氏と再び食事をして女子青年会の事について話をする予定と伝える。河井道子とも相談する。
9月15日（月）	新渡戸先生に電話をかけた所、午後に渋沢栄一氏の事務所にお出でくださるとのこと。渋沢男爵と会見の為、同氏兜町の事務所へ行く。新渡戸先生もお出でくださり、共に渋沢男爵へ在米女子青年会について、陳情し寄附金の依頼をした。添田氏が渡米中に久太郎から、応接された話を聞いている。熟考の上、浅野氏と相談しますとの返事。同所にて倉知氏と成瀬仁蔵氏とも面会する。新渡戸先生はこの件について引き続きお考えくださっている。浅野氏からの手紙に返信をする。
9月16日（火）	朝、新渡戸先生へ電話を掛けて添田氏訪問についての相談をする。添田氏宅へ伺うはずが、訪問してくれるとの事。添田氏と夫人が女子英学塾に來訪され、同窓会室にて応接する。先日の渡米について、久太郎や牛嶋氏からの応接について、報告があった。その後、女子青年会の話になり、浅野氏・渋沢男爵にも会見した事を話す。外務省への報知の話しもある。
9月17日（水）	森村家へ市左衛門氏訪問について電話をかける。向かう途中に三田の浅野氏宅へ寄るも留守。先日の御礼を伝言する。森村家では女子青年会の設立目的について話をする。熟議され、万事については成瀬氏大倉文二氏に相談するとの事。
9月20日（土）	事前約束の上、東洋汽船会社へ行く。浅野氏より女子青年会への寄附金を受取に行く。同じく渋沢男爵よりの合計金1,000円を受取る。東洋汽船会社にて井坂孝氏に女子青年会の事業目的を話す。坂田氏会見の機会がありとの事なので、寄附金を受取り帰る。
9月21日（日）	新渡戸先生と依津氏・浅野氏よりの寄付の事相談。通商坂田局長へ面会の事、添田氏とも取引する事について報告をする。
9月23日（火）	朝、大倉氏が来訪。女子青年会へ森村氏から寄附金300円と大倉孫兵衛氏と成瀬氏よりの200円と合わせて500円紙幣を持参くださる。森村氏、浅野氏、渋沢氏・大倉孫兵衛氏へ手紙を出す。

21) 添田壽一……1864年9月15日－1929年7月4日、福岡県出身。1884年東京大学卒。同年大蔵省に入り、旧藩主黒田長成に随行し自費でイギリス、ドイツに留学。1887年帰国し、大蔵省で主税官、大臣秘書官、監督局長、大蔵次官等を務め、金本位制の実施や台湾銀行の創立に尽力した。1899年台湾銀行初代頭取となる。日本興業銀行と日仏銀行の創立に参画し、日本興業銀行初代総裁、中外商業新報社社長、鉄道院総裁、報知新聞社社長、台湾銀行監査役等に就任した。このほか、早稲田大学、専修学校、学習院、東京帝大等で財政・経済を講じた。（参考：国立国会図書館「近代日本人の肖像」）

22) 『新天地』1913年11月1日の「個人消息」欄によれば2,000円を集めたとされる。

から寄附金集めに奔走している記事を抜書したものである。参照しながら読み進めてほしい。

余奈子を書き記した寄附金合計は1,500円であった。日記に記された寄附者については、浅野総一郎・渋沢栄一・森村市左衛門・大倉孫兵衛・成瀬仁蔵である<sup>23)</sup>。日本出発は1913年9月26日なので、帰米直前まで寄附金集めをしていた事が分かる。

表③から余奈子の寄附金集めの一連の活動を見ていくと大倉文二（以下、大倉）の名と新渡戸の名が良く見られる。『回顧二十年』に記載された通り、新渡戸の斡旋による寄附活動である事が分かる。では、もう一人の協力者、大倉とは誰なのか。拙稿「安孫子家文書から見る安孫子久太郎と須藤余奈子の出会い」の中で触れているが、久太郎と同郷で共に新潟から出奔した人物で名を佐藤文二と言う。勤勉さが買われ大倉孫兵衛の娘婿となり、大倉家の養子となっていた人物である。今まで、桑港日本人YWCAへの寄附金集めには新渡戸の功績だけが関連付けられていたが、大倉も大きな役割を果たしていた事を付記したい。

余奈子帰国後の桑港日本人YWCAの予算については史料がないので、検討をする事ができないのが現状である。しかし、日本人社会の発展により経営の不安も緩和され、1920年サター街に新しい会館を購入する。購入基金は3,000ドルで、余奈子の特別な働きかけとリビングストーン地方の日本人の募金744ドル、ミス・エリスの尽力により紐育米国女子青年会本部からの1,500ドルの資金提供があって実現している。

1921年3月には移転を完了。購入金は1931年1月に完済している<sup>24)</sup>。

初期桑港日本人YWCAは資金繰りに苦労していたものの、着実な経営を行い活動を拡大・継続して行くのである。その足が掛かりとして1913年の日本での寄附金募集活動が重要な意味を持っているのである。

### 創立初期桑港日本人YWCAの展望

創立初期の桑港日本人YWCAでは在米YWCAと連携を取りながら、毎週火曜日に英語研究会を開催していた事は先にも述べた。また、役員

23) 成瀬仁蔵…1858年6月－1919年3月4日、山口県吉敷村に生まれる。山口県師範学校を卒業後、大阪に梅花女学校を創設。1890年米国へ留学、女子教育研究に従事。1901年日本女子大学校を開校する。

24) 前掲注10、5頁参照

会を週2回程開催していたが、1年も経たない内に形骸化される様になる。幹事や役員などが固定せず流動的であった事が、母体を軟弱なものにし、定期的な活動にまで悪影響を及ぼすようになっていた。

初期の桑港日本人YWCAは資金繰りに苦労していただけではなく、渡米してくる日本人女性の対応にも苦慮していた。これは、桑港日本人YWCAの母体が不安定なままで活動を始めた事に起因しており、渡米してくる日本人女性に対して一貫した支援と管理を提供する事を困難にしていた。

そのため、専任幹事を雇入れこれに対応してもらう事を目指す。この専任幹事の雇入れについては、久太郎も余奈子に助言している。1913年6月10日、8月25日、9月4日帰国中の余奈子に送った手紙から読み取る事ができる。以下その文面の抜粋である。

(1913年6月10日)

数日前女子青年会の総会有之。役員選挙の結果、旧役員再選せられたる由に御座候。未婚婦人渡米の件、新渡戸博士とも御話に相成候内、此事は是非実行出来る様致度存候。願事の件は其後如何相運び候や。是又必要欠くべからざる事故、日本の篤志家と御相談の上、せめて一名丈なりとも是非共御送り被下候。青年界事業の成否は幹事の有無に大関係有之候。

六月十日 久太郎

最愛の余奈子どの

(1913年9月25日)

女子青年会の為色々御尽力の由、御申越の通り、専任幹事なくしては十分の活動覚束なく存候俟、是非共必要の資金と適當の人物とを得度希望所在候。当時、帰国中のミス・マシウも当国在任同胞婦人の状態を見て大に同情を依せられ米国人の援助を得て、是非(解読不能)一人を願求様致度旨、申居られたる旨承り候。

私は本週中に同嬢に面会する筈に付、私よりも改めて同嬢の尽力を求め積りに御座候。

(1913年9月4日)

女子青年会の為め色々御奔走の由、激暑の処仲々御骨折の事と存候。  
 ■■■民始め、森村其他諸民の同情により応分の寄付金相集まり、せめて一人の日本人幹事差入相出来候はば、洵に好都合に御座候。ミス・マシューも御帰米以来、在米日本婦人の状況を見て大に感ずる処有之。有人間遊説して幹事雇入の為め、寄付金募集せんとて色々御講究中との事に候。明晩宅へ御招き致し此等の件につき篤と御相談致す筈に御座候。

久太郎は余奈子に専任幹事の重要性を説くと同時に、新渡戸博士とも御話になり、一名だけでも是非お送りくださいと書いている。先にも書いたが、余奈子は日本へ帰国後、寄附金集めに奔走している。この寄附金を資金源として専任幹事の招聘が実現する。一代目の幹事はハーワス夫人、二代目幹事は伊集院秀子が就任し渡米婦人のために尽力していく<sup>25)</sup>。

余奈子は帰国中にも道子や日本のYWCAのメンバーと会談を重ねており、1913年7月4日（金）には女子青年会に道子とマクドナルド氏を訪問し会見。桑港女子青年会事業の事を熟議している。専任幹事の登用や在日YWCAへの働きかけがあったからこそ、1915年に道子がアメリカを訪問し横浜YWCAと桑港日本人YWCAが移民事業の提携をするに至っている。横浜YWCAとの移民事業の締結のおかげで、渡米日本婦人達が救われる事となる。本稿では触れないが、渡米女性へのYWCAの働き掛けについては、別稿で検討する。

## おわりに

本稿では桑港日本人YWCAについて、先行研究で用いられてこなかった史資料、桑港日本人YWCAの総委員長であった余奈子の日記、手紙、桑港日本人YWCA設立に寄与した伝道団の機関誌『新天地』から設立初期の桑港日本人YWCAをなるべく詳細に、時間軸を正確にしながら状況を解明する事を心掛けた。

従来の研究では、桑港日本人YWCAについては20周年記念誌『回顧

25) 前掲注10、3頁参照

二十年』の情報を基に研究が進められ、当時の状況が描かれてきた。この史料は雑誌として発行されているため、非常に読みやすく史料として使い易い。しかし、その正確性や制作者にまで注意を払っていないため、史実との整合性や裏付けがなされてこなかったのは問題である。

そこで本稿では『回顧二十年』の内容についても再検討を行い、従来の研究では取り上げられてこなかった伝道団についても時系列に沿って、桑港日本人YWCAとの関係性と活動実績を明らかにしてきた。

第1章では先行研究の動向と問題点、YWCAとはどのような団体であったのか。日本のYWCAがどの様に設立されたのかについて、先行研究を基に述べてきた。

第2章では桑港日本人YWCAの設立過程について、まずは設立発起人である伝道団について吉田氏の論文と機関誌『新天地』を参考にしながら詳細に説明をした。

設立過程については時間軸を大切にしながら、関係者、関係事項などを明らかにした。従来の研究では一部の教界婦人が集まり設立され、更にその過程については特に注目されて来なかった。

本稿を通して、桑港で日本人移民社会にある程度の影響を及ぼすことになる団体の設立への過程と、困難、工夫、人間関係が明らかになったと思っている。

どの団体であっても発生過程を丁寧に見直し、検証する事により、その後の活動の基盤が明らかとなる。一見地味な作業だが重要な部分でもある事を再認識した。

第3章では、桑港日本人YWCAの1912年～1913年にかけての初期活動について、財政状況と具体的な活動実績を明らかにした。財政状況については数少ない資料ではあったが、収支表を作成する事によって状況を可視化できる様に心掛けた。

本稿では、外国での日本人女性による日本人女性のための団体設立について詳細に検討し、桑港日本人YWCAの設立が決して順風満帆ではなく、むしろ開会直後から困難な道へとひた走り、状況を打開するための活動について、余奈子という女性が残した日記に注目し、その他史料を用いながら、活動実績を出来るだけ正確に明らかにした。

今回新たに桑港日本人YWCAへの寄附金提供者に成瀬仁蔵がいた事が分かった。

また、一部ではあるが、日本の財界人の繋がりについても垣間見る事ができた。渋谷栄一と梅子はかなり密接なつながりがあったので、漠然と余奈子との関係も渡米する以前からあったものと思っていたが、実際には1913年の帰国時の寄附金募集活動まで、関係性はあまりなかった事も分かってきた。

余奈子是新渡戸夫妻との関係が非常に密接で、日記・手紙にとその名を何度も目にする。これまで、安孫子夫妻に関する人物相関には久太郎をとりまく財界人や各業界の指導者を中心に系図を広げていたが、今後は余奈子を取り巻く人物関係にも着目していきたい。